

1 研究主題

互いに認め合い、共に学び合う

～自己との対話・他者との対話を通して、学びを深め、よりよく生きる～

2 研究主題設定の理由

社会の在り方が劇的に変わる中、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」が来ていると言っても過言ではない。今までにない課題に直面し、その対応に追われるだけでなく、それに加えて、教育現場は日々新たな課題を目の前にしている。文部科学省、中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」(R3.3.30 更新)でも、「新学習指導要領の着実な実施」「GIGAスクール構想の実現」「学校における働き方改革の推進」などが掲げられ、取り組むべき課題が多くある。本校も例外ではなく、新学習指導要領に準じた「主体的・対話的で深い学び」の実現へ向けた取組や一人一台のタブレットの活用、教員の働き方改革を日々実践している所である。

本校は今まで「聴く」「話す」を中心に添えて研究に取り組んできており、学習指導要領と重なる部分も多くある。児童が「主体的」「対話的」に学ぶ手立てとして、「課題・場の設定(授業のデザイン力)」「教師の姿勢(授業の対応力)」「自己との対話、他者との対話(なかふじの『聴く』『話す』)」を柱として研究の推進を行ってきた。その中で、児童自身が「聴く」「話す」の意味や価値を少しずつだが感じることができるようになってきている。教師が「聴く」「話す」を意識した授業づくりをすること、そして、児童自身が学びや生活の場面で「聴く」「話す」ことを活用しながら、その有用性を感じるという相互の作用により、対話の素地がつくられてきたと言える。

また、11月17日には全国小学校道德教育研究大会を控え、道德科の授業研究、道德教育の充実を図っている。中藤小は大規模校で教職員の入れ替わりも多い。また、若手の教員の割合も高い。その中で全教職員が協働して研究に取り組めるような組織づくりをしてきた。今年度も昨年度に引き続き、全教職員が「道德グループ」に所属し、4つのグループに分かれ授業研究を行っている。全ての教職員が授業をすることで、学校全体の授業力を高められるよう努めてきた。また、日常的にも授業についての話が自然とできるようになってきており、教員の意識の高まりも見えてくる。また、日常的にも授業についての話が自然とできるようになってきており、教員の意識の高まりも見えてくる。

道德科の充実がすぐに実践力など目に見えてくるのは難しく、研究も半ばである。ただ、教員が焦って、道德科の授業が生徒指導や徳目主義的な道德にならないように気を付け、「考える道德」「議論する道德」になるよう日々の授業改善を行いながら研究を進めている。

「学習指導要領 第1章 総則」において、「道德教育は学校の教育活動全体を通じて行うもの」とされている通り、あらゆる場面で児童の心の成長を促したい。そして、心の成長はあくまで自分の中で生まれる変化であるが、そういった成長は自己の中だけで完結されるものではなく、他者とのかわりっここそ生まれるものなのである。そこで対話を手がかりに、「互いに認め合う」ことを目指し、各教科や生活の中で「共に学び合う」関係をつくっていきたいと考え、研究主題を「互いに認め合い、共に学び合う」に設定した。

なお、後述する「研究の内容」は以下のように3つに分けた。「3 研究の内容(学校全体の研究)」では、これまで本校が積み重ねてきた研究の基盤となる考え方について。「4 研究の内容(道德科について)」では、児童がよりよく生きるための道德性を育む姿について。また、道德科における授業力向上のための取組や「考える道德」「議論する道德」を実現するための工夫や手立てについて。「5 研究の内容(道德教育の推進について)」では、学校教育全体を通して道德性を養うための全校での取組について説明している。

3 研究の内容(学校全体の研究)

(1) 研究主題のとらえ方

「互いに認め合う」とは

- ・ 相手を思いやりながら、思いや考えを適切に伝え合うこと。
- ・ 自分のよさに気づき、他者のよさに目を向けること。
- ・ 児童相互に温かい心の交流が生まれ、思いやり、協力、助け合いなどの豊かな人間関係が育つこと。
- ・ 学習活動に意欲的に取り組み、主体的な学びの中から、学ぶ楽しさや喜び、達成感や成就感をつかみ取ることができること。
- ・ 自己を表現したことが集団の中で価値あることとして認められ、もてる力を発揮できること。

「共に学び合う」とは

- ・他とのかかわりを楽しいと感じ、**かかわり合うことの価値**に気付くこと。
- ・一人一人が**自分の考え**をしっかりと、話し合いに参加できること。
- ・一人一人の願いや思いや活動が、さまざまな仲間や先生、地域の人と**協働**することで深まっていくこと。
- ・自他の体験の共有により、**豊かな体験**に裏打ちされた見方・考え方ができるようになること。

(2) 研究の3つの柱

研究の柱① 課題・場の設定(授業のデザイン力)

児童が、対話的な「聴く」「話す」を行うためには、児童に「話をさせる」という視点ではなく、児童自身が「話したくなる」という視点に立った課題づくりが大切である。教師が「探究」「目的意識」「必然性」「意外性」「当事者性」「多様性」「対立」「自己有用感」を意識して、あらゆる場面に応じた課題の設定を工夫することで、児童の意欲を駆り立て、話すことの必要性を感じることができるようになるだろうと考える。

また、ペア・トリオ・グループを意識的に設定したり、児童同士のかかわりを意識したりしていきたい。そこでも「ペア」「グループ」ありきの授業構成ではなく、教師自身がその目的をしっかりと捉えながら「話し合う場を保障するために」「自信をつけさせるために」など意図的に行うことでより効果的になると考えている。他にも、ホワイトボード・付箋・思考ツールなどを活用して思考の可視化を図っていき、互いの考えを共有しやすくしていく。そして、何よりも児童が、安心して自分の考えを話すことができる温かい雰囲気をつくっていききたい。

研究の柱② 教師の姿勢(授業の対応力)

まず、教師自身が、児童にとってよいモデルとなっていきたい。児童の声を聴き、どう応え、反応していくのか。そして、児童の思考を深めるために、どのようにして声かけをし、働きかけ、価値付けていくのか。今一度、教師の姿勢・立ち振る舞いを考えていきたい。児童が教師をモデルとして捉えるだけでなく、児童同士のかかわりの中でもよい関係や言葉のやりとりが生まれる場面もある。そういった場面も教師が逃すことなく価値付けていくことも教師の姿勢として大切なことになってくる。

「教師の姿勢」を育てていくためには、日々の授業からの意識付けが大切になる。しかし、日々の中で忙殺されてしまうのも現実である。個々の技量に任せるのではなく、教師集団として協働することが必要になってくる。授業や児童とのかかわりを気軽に見合い、フィードバックし学び合うための場を今までも本校の研究として取り組んできた。本年度も、全教員が道德グループに所属し、一人一授業をし、ミニ研究会を行いながら授業力の向上、教師の姿勢の高め合いを行ってきた。

研究の柱③ 自己との対話、他者との対話(なかふじの「聴く」「話す」)

児童が、課題を追究し、深めるために、6年間を通してどのように指導していけばよいのか、中藤小学校の児童の実態に合わせて考えていきたい。「対話する」「議論する」土台として大切なことは「ことば」をしっかりと意識することである。一般的に言われる語彙力を高める指導は国語科を中心に、各教科の指導事項をしっかりと押さえることが大切である。これを「学ぶ対象のことば」とすると、柱の対話力を育む上では大切なことは「学びを媒介することば」の成熟だと考えた。そして、この「学びを媒介することば」は、児童が失敗しても繰り返し使うことで、自信につなげていくことが必要である。また、学級の雰囲気としてなんでも言っていいたいという安心感がもてるようにすることが大切だと考えた。

このように、対話の「量的確保」をすること、そして、正解のみを求めるような発問ではなく、児童が自然と語りだす、聴き合うような対話の「質的転換」を目指していくことが、「自己との対話」「他者との対話」を生み出し「深い学び」に迫るための手立てとなっていくと考えた。

(3) 研究の組織

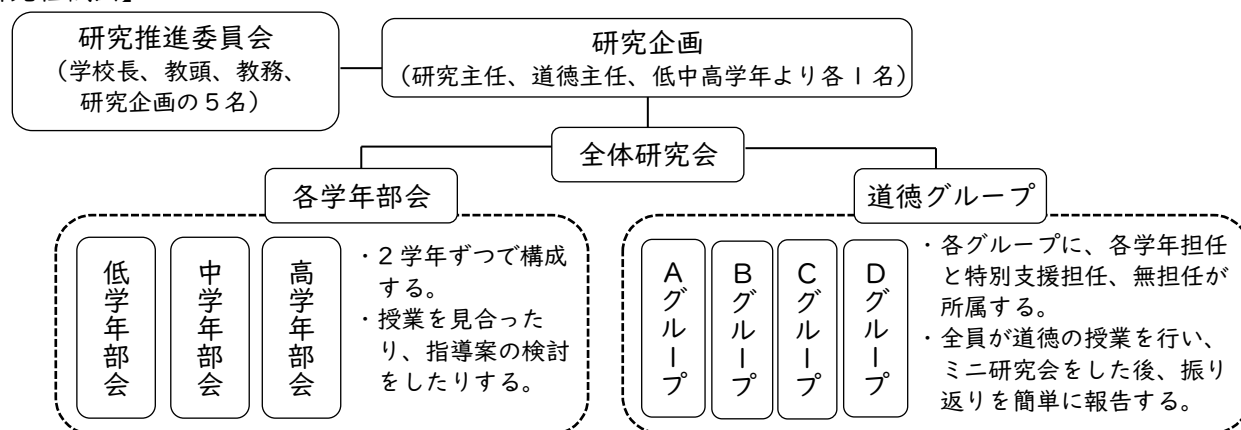
【教師協働でつくり上げる授業】

中藤小学校は先述の通り、大規模校で教職員の入れ替わりも多い。また、若手の教員の割合も高い。そのような中で全教職員が協働して研究に取り組めるような組織づくりを以下のように行ってきた。

- ・ 道徳グループでの授業実践検討
4グループに分かれて、年1回すべての教員が授業公開の後、ミニ研究会の実施
- ・ 学年協働による年2回以上(中藤小学校道徳科研修会・プレ大会)の授業づくり
- ・ 学年での教材研究
各担任・副担任が一つの教材で各クラスの授業を行う。そうすることで一つの教材に力をいれて研究を行うことができるとともに、負担の軽減も意図している。また学年の児童を学年全教員で見るという協働も狙っている。
- ・ 協働による省察
実践記録は、同じ学年の教員全員で書く。

このような体制で研究を行うことで、日々の授業づくりについても職員室などで話題となることも多々見られるようになった。ベテラン・中堅・若手など経験年数を超えながら学び合う関係が構築されてきている。ただ、まだまだ発展途上という点は否めない。これからも、どの教員も積極的にチャレンジすることで、「研究」としての学びではなく、児童・教師自身に返っていく「研究」となるようにしたい。

【研究組織図】



各学年部会（ペア学年）

低学年部会	◎齋藤、木村、久藤、小川、酒井、西川、三屋、坂部、山本、成川、五十嵐、院：川畑
中学年部会	◎出雲、経石、森下、友田、大野木、桶屋、天井、綿谷、小竹、峯村、
高学年部会	◎河合、馬場、三崎、竹原、植坂、大石、原谷、片岡、飛山、畑中、嶋田、院：中村

※堀江・向本は所属しない。

道徳グループ

	A	B	C	D
1年	久藤	木村★	小川	酒井
2年	西川★㊟	三屋		齋藤
3年	経石	出雲㊟		友田
4年	綿谷	桶屋	大野木★	天井
5年	河合㊟	馬場㊟	竹原	三崎★
6年	原谷	植坂	大石	片岡
なかふじ	成川		五十嵐	山本
無担	飛山		向本 小竹	峯村 嶋田

★・・・道徳グループリーダー ㊟・・・研究企画

4 研究の内容（道徳科について）

（1）研究の柱①～③と関連させた道徳科での取組

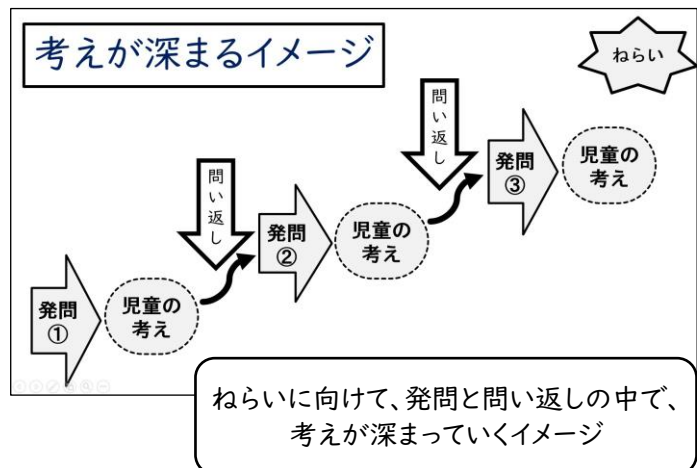
研究の柱① 課題・場の設定（授業のデザイン力）

【発問の工夫】

教師が45分の授業の流れを考える際、ねらいとする価値に迫るため、どの場面でどのような発問を投げかけるかがとても重要になってくる。そこで、発問を考える際に、「資料の一部分だけでは考えることができない発問」「考える価値のある発問」「素の自分が出せる発問」「自分自身の経験や友達との対話の中で答えが導き出せるような発問」などとなるように意識している。また、その発問をいつ行くと効果的に児童の思考を深めることになるかも考えながら、発問を精選している。

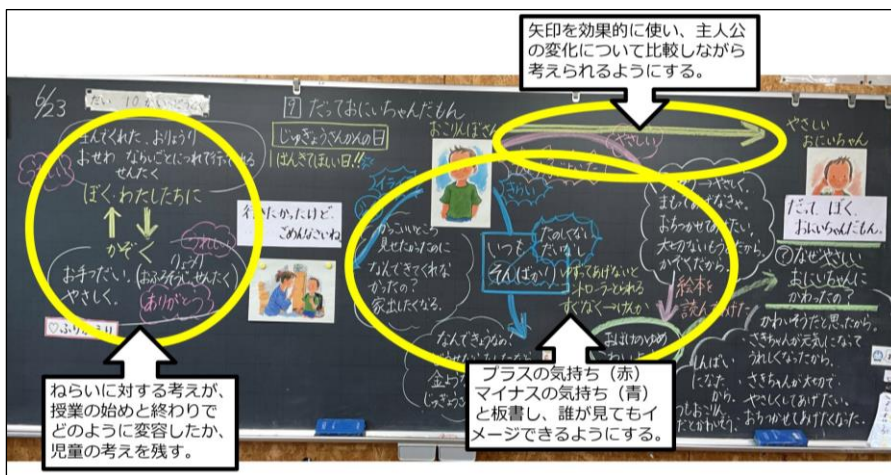
【問い返しの準備】

さらに、本校では中心発問に対して、考えを深めさせる「問い返し」となる発問を大切にしている。「問い返し」が、本当にその時間に児童に考えさせたいことの中心となっている場合も多く、中心発問に対して行うこともある。また、それ以外の流れの中で、児童の考えを修正したり、意識させたいことに目を向けさせたりするため、意図的に行うこともある。授業を考える際に、様々な「問い返し」を用意し、児童の発言や思考の流れに応じて投げかけている。



【学び合うための手立て】

本校では、児童の学び合う場を設定するための手立てとして、様々な形態での学習活動や思考ツールなどの活用、心の可視化を図るためのツール、構造的な板書の工夫などを積極的に行っている。しかし、これらは、あくまでも学び合うための手段であり、目的にならないように留意している。



構造的な板書のために

- ・縦書き、横書き
- ・思考ツールの活用
- ・矢印
- ・レベル・階層や順位
- ・色による分類
- ・数字で度合いを表す
- ・表情カード
- ・対比させる
- ・ネームマグネット

など

研究の柱② 教師の姿勢（授業の対応力）

【児童の発言に対する反射神経】

道徳科の授業では、児童のつぶやきや発言を拾いながら、次の発問や展開につなげていく必要があると考えている。もしも、事前に考えていた発問を順番にするだけならば、授業に流れがなくなり、途切れた印象になってしまうからである。そこで、授業者は、教材研究の中で学習指導要領を読み、授業学年の「指導の要点」や、本時のねらいなどからキーワードとなる言葉や、発問につながりそうな言葉を挙げておくようにする。そうすることで、授業で取り上げたい言葉を意識しながら授業を行うことができ、授業者のやりたいことや考えさせたいことが明らかとなると同時に、ブレがなくなり、筋の通った授業になると考えている。

例としては、「さっき〇〇さんが言ったことだけど・・・□□についてもう少し聞いてみてい

い？」や「一番みんなから出てきている言葉って□□だね。□□ってどういうことなの？」など聞くことで、その後の発問につなげることができる。また、「そのこと、もう少し詳しく言ってみて」や「みんな、〇〇さんの言いたいこと分かる？」「付け足して言える子いる？」など、児童の発言をつなぐことで、児童の思考を深めることができると考えている。さらに、児童の反応が予想と違い、あらかじめ用意していた流れと違う展開になっても、無理に修正せず、その流れに乗ってみることも大切ではないかと考えている。

【学び合う教師集団であるために】

教師同士が学び合うため、全教員を A～D の 4 つのグループに分けて授業研究を行っている。年に一度は、どの教員もグループ内で授業公開を行い、授業後にミニ研究会をすることで、互いに学び合う機会を設けて、研鑽を図れるようにしている。教科担任や養護教諭、栄養教諭などは、他学級にて道徳をしたり、自分の担当する教科の中に道徳的な活動や関連する内容項目を意識して取り入れたりして授業を行った。また、「特に取り組んでみたいこと・授業の中で工夫してみたいこと」や授業を公開する時期を事前に設定し、焦点化しておくことで、授業者も参観者も同じ視点で授業を見たり振り返ったりすることができた。順番に全員が授業実践を積み重ねていくことにより、「自分が授業者だったらどんな発問をするか」と考えながら授業を見ることができるようになってきただけでなく、より児童に深く考えさせるための展開を各教員が考えながら研究会に参加するなど、有意義な時間となっている。

【各学年での協働】

また、本校は、各学年 3 学級または 4 学級で構成されている。それを生かし、学年で担当教材を設定し、一人の教員が順番に同じ学年の他学級にて道徳授業を行った。そうすることで、毎週必ず行う教材研究の負担を軽減できるだけでなく、同じ授業を繰り返す中で児童や学級の実態の違いによる反応の変化に応じて、問い返しを変えたり、板書を変えたりでき、回数を重ねるごとに授業の深まりが見られた。さらに、学年の児童は学年全ての教員でみるという意識を高められた。

研究の柱③ 自己との対話、他者との対話（なかふじの「聴く」「話す」）

【対話の時間を大切に】

道徳科では、「考える道徳」「議論する道徳」を通して、多様な価値観に気付き、自己を見つめ、自己の考えの変容に気付くことを目指している。そのために、自己との対話、他者との対話は不可欠であると考え。そこで、本校では、『なかふじの「聴く」「話す」』と位置付け、児童一人一人が考えをもって他者と交流し、自分の想いを伝えたり相手の考えを聴いたりする場面を多く設定している。友達に話すことで自分の考えを再構築できるだけでなく、友達の考えを聴くことで新たな価値に気付くことも期待できるため、児童も対話することのよさを感じている。また、「本音を話すこと」ができることが「考える道徳」「議論する道徳」の上では欠かすことができない。うわべだけの「よさ」や徳目的な道徳にならないように、他者の言葉に時に共感し、時に批判しながら「議論」できることを目指している。すべての教育活動を通して大切なことであるが、道徳科でももちろん、安心して発言し聴いてもらう「応答関係」を構築していきたいと考えている。



帽子の色で意思表示しながら対話する様子

（２）研究の柱①～③との関連以外のその他の道徳科での取組

【全校でそろえて行っている取組】

１つ目の取組として、毎時間の授業のカウントを黒板 に掲示したり書いたりすることを統一している。これは 35 時間の授業時数を確保する意識付けのため、授業の回数を毎時間表示することで、教師だけでなく児童も本時が何時間目にあたるのか意識しながら授業に参加できている。

２つ目の取組として、板書写真などを残してクリアケースに保存している。四つ切りサイズのクリアケースに教材名と内容項目を色分けしたラベルを貼ったものを作成した。中には、掲示用挿絵・

板書写真・ワークシート・アイデアシート等を入れるようにしている。また、授業の反省点や振り返りなども付箋でメモ程度に残している。そのため本校では、授業前にこのクリアケースを確認し、前年度や他学級で行った授業板書やメモを参考にしながら授業プランを練ることができる。このようにして、積み重ねて保管していくことで、発問の質の向上や、構造的な板書のための工夫が期待できると考えている。

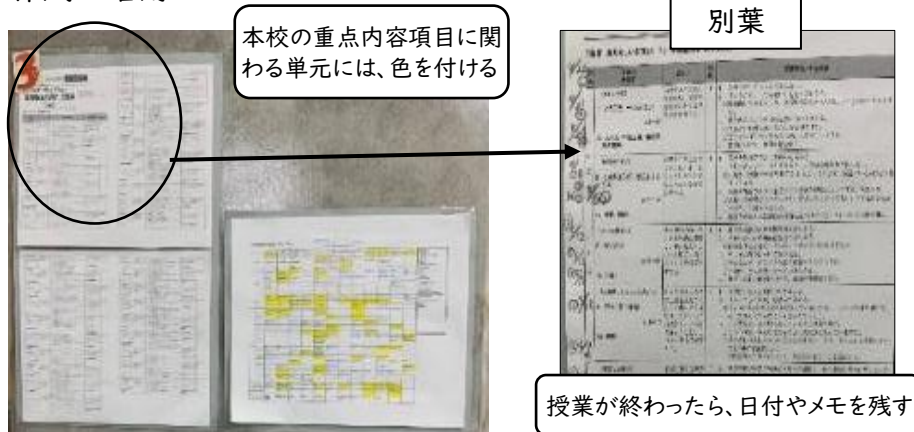
【終末の時間を大切に】

授業の後半に教材の内容から離れて、自分自身の身近にある生活やこれからの生き方について考える時間を大切にしたいと考えている。そのため、時間配分に気を配りながら、後半に時間を掛けられるように事前に教材文を読んでおいたり、登場人物や場面の理解をしやすくするための様々な手立てをとったり、中心発問までの時間を短く設定したりしている。また、その際に、児童が自分の身の回りのことを思い浮かべたり、自分に置き換えながら考えたりできるように児童に提示する場面例などの精選も大切にしている。振り返りの時間も、温かい雰囲気で行われるように、前向きな話をしたり、児童のよい姿やエピソードを紹介したりするなどして、工夫していきたい。

5 研究の内容（道徳教育の推進について）

（１）年間指導計画・別葉の作成と活用

各学年の道徳の別葉と年間指導計画を職員室に掲示し、いつ、どの場面での内容項目を指導するのか意識できるようにしている。さらに今年度の本校の重点内容項目「A 善悪の判断、自律、自由と責任」「B 親切、思いやり」「B 相互理解、寛容」に関わる單元には色を付けて、特に意識付けられるようにした。活動に入る前に確認し、ねらいを明確にし、指導に当たっている。また、授業が終わった日付やメモを年間指導計画に書き込むことで、年間35時間授業確保の意識付けも行っている。



（２）道徳教育に関わる取組の周知

学校での道徳の取組を「道徳便り」として、学年便りやホームページに掲載し、家庭や地域に発信している。今年度は、学年ごとに隔月で作り、授業中の児童の発言や授業後の振り返り、板書の写真などを中心に伝えている。

また、学級によっては、担任が「学級便り」の中で道徳の授業の様子を紹介し、保護者に感想を書いてもらい、次の授業に生かすなど、家庭や地域との連携を図っている。

